Okayama Prefectural Museum

岡山県立

博物館だより

2004.3.31

61号

平成15年度 特別展 動乱と変革の中で ～岡山の幕末維新～を終えて

平成16年１月30日から２月29日にかけて、平成15年度２回目の特別展「動乱と変革の中で～岡山の幕末維新～」を開催しました。この展覧会では、幕末維新期の岡山の人々が、何を見、何を考え、どのように行動したかを、岡山ゆかりの人物や事件に関連した資料から紐解いていこうとしました。厳しい気候にもかかわらず多くの方に御来館いただき、担当者としては安堵の思いとともに、感謝の念でいっぱいです。また授業の一環として、岡山県立岡山朝日高等学校・岡山県立岡山操山高等学校・岡山市立後楽館高等学校の生徒のみなさんにも御来館いただきました。ありがとうございました。

今回の展覧会では、あらためて幕末から明治維新の時期に対する関心の高さを認識いたしました。この時期が人々の関心を集めるのには、日本の歴史の中で大きな変革の時代であったことがあげられます。幕末維新期だけではなく、平安時代末期から鎌倉時代の武家政権の誕生や織田信長・豊臣秀吉・徳川家康が活躍した戦国時代末期から江戸時代初期なども、日本の歴史の上では大きな変革の時代でした。しかし、幕末維新期に大きな関心が寄せられるのは、この時代が武士・農民・町人などの身分や男女の性別などに限らず、当時の人々の多くが、日本の将来を憂い、どうあるべきかを考え、実際に行動したことにあると思います。幕末維新期と言えば、坂本龍馬・高杉晋作・木戸孝允・西郷隆盛・勝海舟・近藤勇などといったテレビや小説などで取り上げられる著名な人物の活躍に目を奪われがちです。しかし、直接的とは言えないまでも、彼らを支え実際に行動したのは、小説やテレビでは名前も出てこない多数の一般民衆だったのです。

このような人々の動きをどのように展示に反映させるかが、実は今回の展覧会における大きな課題の一つでありました。その試みとして、第一に民衆の政治意識の高まりを政治批判資料から見てみること、第二に「世直し一揆」や「ええじゃないか」などの民衆運動を取り上げること、そして第三に戊辰戦争に参加した農民の姿を追うことにしました。実際の展示の中で、その課題を果たすことが出来たかどうか、大変心許ないものとなってしまった気がいたします。

また、地元でしか知られていない人物や事件を紹介するのも大きな課題の一つでした。展覧会では、鶴田藩や神戸事件などを紹介することが出来ました。しかし、まだ歴史に埋もれたままの人物や事件が多くあると思います。今後これらを少しでも掘り起こすことが出来ればと考えています。　　（学芸員　横山　定）

絵馬　会津戦争の図（瀬戸町　築領八幡宮蔵）
戊辰戦争に従軍した赤坂郡下村の農民６名が帰国後奉納した。

博物館の仕事ってなに？　～中学生の職場体験学習～

岡山県立博物館では、県下の公立中学校が実施している中学２年生の職場体験学習について、今年度は倉敷市立庄中学校（３名）、岡山県立岡山操山中学校（５名）、岡山市立竜操中学校（５名）、岡山市立吉備中学校（５名）、岡山市立御南中学校（４名）の計５校22名を受け入れました。生徒たちには、博物館の受付や展示室の看視だけでなく、資料整理など学芸員の仕事も手伝ってもらいました。きっと博物館の役割や自分たちの将来を考えるよい機会になったことと思います。本館は教育現場との連携に積極的に取り組んでいますので、今後とも御活用ください。　（学芸員　佐藤寛介）

博物館の受付（岡山市立竜操中学校生徒）

弥生土器の洗浄（岡山県立岡山操山中学校生徒）

館蔵資料の御紹介　～山陽町朱千駄（しゅせんだ）古墳の組合式長持形石棺～

県立博物館の玄関に向かい、少し目を左に移すと二つ並んだ大きな石の棺が視界に入ってきます。今回は左（南側）に位置する背の低い方の石棺について紹介をいたします。

この棺は、死者のために作られた石の柩（ひつぎ）で、蓋石・底石・４側石各１枚の計６枚の板石を組み合わせて作られています。蓋石と長側石に大きい縄掛突起、短側石に小さい突起が見られます。蓋石の長さ241㎝・幅98㎝、長側石の長さ259㎝・幅58㎝、短側石の長さ59㎝・幅58㎝、底石の長さ222㎝・幅95㎝をはかり、大人が横になれる十分な空間が作り出されています。

この長持形石棺は兵庫県加古川地方（高砂市）に産出する竜山石（たつやまいし）で作られており、５世紀後半頃に約73.5㎞離れた岡山県赤磐郡山陽町穂崎の朱千駄古墳（墳長70ｍ）まで運ばれています。

畿内の大王や、地域の最有力者が用いた竜山石の長持形石棺に埋葬された朱千駄古墳の主は、果たしてどのような人だったのでしょう。また、北東600ｍに位置する両宮山古墳（墳長192ｍ）との関係においても興味は尽きないものです。

この朱千駄古墳は明治３年に後円部が穿かれ、玉類・古鏡・古刀剣などが出土し、棺内のおびただしい量の「朱」の出土から「朱千駄」と呼ばれたことが伝えられています。再び明治25・26年頃に蓋が開けられ、再埋葬されていた発掘品はほとんどが散逸してしまっています。そして、昭和８年に石棺は県郷土館、戦後に県総合文化センターに移転し、昭和46年に県立博物館に納まっています。　（副館長　高畑知功）

新出資料 初公開の御案内　常住寺の仏像～江戸時代仏像彫刻の名品～

天台宗寺院常住寺圓務院は、もとは岡山藩主祈祷所として岡山城に隣接する石山にありました。宝永４年(1707)東叡山寛永寺の直末となり、伽藍を再建、翌年３月には完成しております。大正時代に現在の岡山市門田文化町に移転しましたが、本堂には本尊不動明王立像のほか、比叡山中興の祖元三大師、阿弥陀如来、文殊菩薩、普賢延命菩薩などの像がまつられ、また境内にあった観音堂(現在は無し)の本尊千手観音坐像も安置されています。本館では、平成16年４月６日(火)～６月６日(日)の春季常設展でこれらの仏像を一挙初公開させていただくことになりました。

常住寺の仏像は、いずれも藩主祈祷所にふさわしく、技術・技法の粋をつくした江戸時代の典型的な作品ばかりです。なかでも、二重の厨子内に安置されていた不動明王坐像は、厨子に書き込まれた銘文や内側厨子に添えられた板銘から宝永年間頃の作と見られ、寛延３年(1750)藩主池田継政のとき、国家の安泰を願って岡山城の天守に安置された像であることがわかります。全身金泥下地の上に、色味の異なる金色で衣の模様を表現したもので、その輝きは今日までほとんど失われておりません。火炎の光背は、細かい寄せ木によって身体を包み込むように整えられています。

これまであまり紹介する機会のなかった江戸時代の仏像の名品を、ぜひ御鑑賞ください。

(学芸員　中田利枝子)

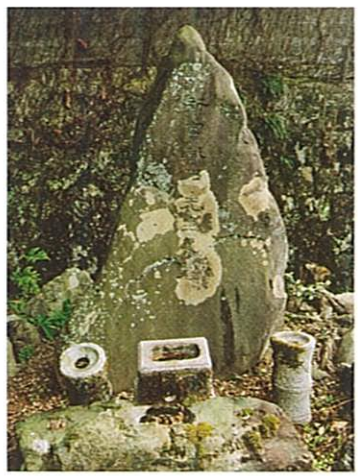
常住寺　不動明王坐像

研究ノート　～岡山の知られざる医師　新宮 涼民～

岡山県は古代から医学と関わりが深い土地です。江戸時代では適塾の緒方洪庵や金川で開業し多くの門下生を育てた難波抱節らがよく知られています。しかし、そのほかにも優秀で大きな足跡を残した医師は少なくありません。ここではそういった岡山の知られざる医師を紹介します。

江戸時代後期、医師を志した者は江戸や京都などの大きな医学塾で医学を学ぶのが通例でした。その有力な医学塾の一つ、京都の順正書院を継ぎ、京都の医療に尽くした人物が新宮涼民(1820～1875)です。

涼民は、備中国黒崎村（倉敷市玉島黒崎）の豪商柚木直助の子に生まれました。医師を志して岡山の蘭方医物部雄民に医学を学び、さらに雄民の紹介で、雄民の師新宮涼庭が開いた京都の医学塾順正書院に入門、蘭学を学びました。天保11年(1840)、師の涼庭が岩手に行くため２～３か月留守をするとき、涼民は留守を託され、毎日40軒の往診をこなしたといわれています。次第に涼庭にその才能を認められると、一字をもらって涼民とし、涼庭の娘松代と結婚、跡継ぎのいない京都の名門医家の新宮家の本家を継ぎました。義弟涼閣と共訳した『小児全書』全６巻を安政４年(1857)に、翌安政５年(1858)には同じく涼閣らと『コレラ病論』を出版。順正書院で門下生の育成に当たりながら、慶応元年(1865)京都医学研究会を組織、明治元年(1868)最初の医師総取締役に任命され、明治５年(1872)には京都療病院（後の府立病院と京都府立医科大学）を開設しました。一方では、同郷となる和算・暦学の大家小野光右衛門などとも交流しています。明治８年56歳でなくなりました。　(学芸員　木下　浩)


新宮涼民の墓(京都市天授庵)

ただいま準備中！　会期：平成16年９月３日（金）～10月３日(日)

特別展

兵庫・岡山・広島三県合同企画

津々浦々（つつうらうら）をめぐる　～中世瀬戸内の流通と交流～

この特別展は、兵庫・岡山・広島三県の県立博物館の合同企画で、７～11月にかけて三館で順次開催します。テーマは中世の瀬戸内各地に出現した港町を舞台に、津々浦々をめぐる船や人々、さらに当時国内で流通したさまざまな品々を取り上げることで、海と密接に結びついた中世瀬戸内海の世界を豊かに描き出そうというものです。

近年、中世考古学の調査・研究が著しく進展し、日本列島をとりまく流通のあり方や港湾都市の姿が明らかになってきました。瀬戸内海沿岸では、広島県の草戸千軒町遺跡をはじめ、岡山県の鹿田遺跡・百間川米田遺跡、兵庫県の兵庫津遺跡などの発掘調査が進められ、中世の瀬戸内に暮らした人々の生活が広範な地域からもたらされた物資によって支えられていたことが確認されています。

また、これら港町相互の結びつきを示す資料として、「兵庫北関入舩納帳」をとりあげます。現在の神戸市に存在した兵庫津は、瀬戸内各地から畿内へと物資を輸送する船の寄港地として繁栄し、港には興福寺領の南関と東大寺領の北関が置かれていました。「兵庫北関入舩納帳」は、北関に文安２年(1445)に入港した船に関する記録で、入港船の船籍地・積荷とその数量・船頭名などが克明に記されており、当時の活発な海上流通のありかたをうかがうことができます。また、入港船の船籍地であった兵庫県の尼崎、岡山県の牛窓、広島県の鞆・尾道などは、港町として繁栄しました。今回の特別展では、これらの港町のにぎわいを今日に伝える文化財も数多く展示します。

中世瀬戸内の商品流通を具体的に示す、香川県水の子岩海底遺跡出土の備前焼。実用的で堅固な備前焼は中世西日本の焼物市場を席巻し、遠く鎌倉や鹿児島まで海路によって運ばれた。

さらに、瀬戸内の商品流通を支えたしくみに注目し、物流に携わった人々・船舶の変遷・港湾の施設などを、資料をもとに再現したいと思います。また、港町が河川交通を通じて内陸部と結びついている様子を備中国新見荘の資料により明らかにしていきます。　（学芸課主査　貝原靖浩）

平成16年度上半期　催し物の御案内

- 現在開催中　※平成16年５月９日（日）まで
  特別陳列「備前の鉄砲」
- 平成16年４月６（火）～６月６日（日）
  春季常設展「常住寺の仏像」
- 平成16年６月　※４～５月募集
  博物館講座
- 平成16年８月　※７月頃募集
  博物館れきし体験・博物館探検

「岡山県立博物館　友の会」設立！

岡山県立博物館では、岡山県の歴史と文化に興味をもつ方々を対象とする「友の会」を平成16年４月に設立します。「友の会」では、入館料割引や催物案内の送付、研修講座や文化財めぐりなどさまざまな事業を行います。年会費は、一般２千円、高校生以下千円、団体１万円です。入会申込やお問い合わせは、岡山県立博物館内　岡山県立博物館友の会設立事務局(086-272-1149)まで。

岡山県立博物館だより　第61号
○発行日　平成16年３月31日
○発行者　岡山県立博物館　館長　松井新一

〒703-8257　岡山市後楽園１－５
TEL(086)272-1149　FAX(086)272-1150
【URL】http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kenhaku/hakubu.htm

R100 古紙配合率100%、白色度70%の再生紙を使用しています